都道府県別賞一等

母の経験から知った保険の大切さ

茨城県　取手市立取手第二中学校　三学年

菅野　結菜

私にとって「保険」とはテレビのコマーシャルやドラマの中で見たり聞いたりしているもので、実生活の中では他人事というか、病気や事故などで生死に関わる時にしか関係のないものだと思っていました。正直なところ、大人になったら知ればいいのかな程度の興味関心で、調べてみようとか知ろうと思ったこともありませんでした。この作文を書くうえで母に保険について聞いたところ、母の実体験の中で、私も間接的に保険の恩恵を受けていたことを知ることができました。聞いたうえで初めて保険について考える機会になりました。

私は二人兄弟で兄がいます。母は兄の出産時にとても難産で、三日間陣痛に苦しみましたが、それでも生まれてこなかったため、促進剤を使用しました。自然分娩の予定でしたが、お腹の中の兄の心拍の低下、母体も限界で危険な状況になり、緊急帝王切開に切り替えて兄は生まれてきたそうです。出産そのものは病気ではないため保険適用外ですが、帝王切開は母体のお腹を切って赤ちゃんを取り出す手術扱いになるため、保険を使うことができることを、母自身もその時初めて知ったそうです。母体に負担が大きかったため入院が長引き、退院後も通院しなくてはならず、医療費も予定より多くかかってしまいましたが、「保険を使えたことでお金の不安はなく、自分の回復と子育てに心のゆとりをもって生活することができたからとても助かった。」と話をしてくれました。私を妊娠した際は、「一度、帝王切開で出産していると子宮破裂のリスクが高い。」と医師から言われていたので、母子共に健康に出産するために、事前に出産日を決めての計画帝王切開で私は生まれてきました。無事出産が終わったものの母は出血量が多く大変だったそうですが、兄の時と同様に保険を使わせていただいたお陰で、「余計な心配はせずに、生まれたばかりの私と二歳の兄と楽しんで生活することができたのでとても感謝している。」と教えてくれました。出産という場面で保険のありがたみを知り、身近なものだったと実感したそうです。

冒頭でも書きましたが、保険は私が漠然とイメージしていた万が一の際に生死に関わる時に使うものだけではなく、今回の母の出産のような場面など、これから私が生きていく様々な場面で、必要になる時、助かる時があるのだと思います。また、自分自身が使うことがなくても、自分が備えていた保険料が必要な誰かのために活用されることがあると知れたのも大きな学びでした。

私は今中学三年生で高校受験を目の前にし、これからの未来で何を学び、どのような大人になりたいのか、どんな生活を送りたいのかを考える岐路にいます。薬剤師になって健康や心を支えられる人になりたいというのが今の私の夢です。今はまだ両親に守ってもらっての生活が当たり前ではありますが、成人までもあと数年、将来の夢を叶えるために頑張っていくうえでも他人事やいずれではなく、保険との関わり方を考えていく必要があります。『備えあれば憂いなし』なんて言葉がありますが、保険はまさに備えなので、私の人生設計の一部だと思って調べていきます。今回人生の岐路で考えるきっかけになったのは、とても大きなことでした。